

魔物まものにさらわれた女おんなの子こ

——コタンコロカムイの妹いもうとが語かたつた物語ものがたり



わたしの兄は、シマフクロウ。人間の村を見守るコタンコロカムイです。
その兄が、親代わりになって、妹のわたしを、大事に育ててくれました。

ある日、兄が狩りに出かけているときのことです。

家で好きな刺繍をしていると、いきなり、戸が、バタン、と開きました。

びっくりして振りかえると、小さくてやせつぼちな小僧がいて、

ぎよろついた目で、わたしをじっと見つめるのです。

怖くなって、にげようとする、やせつぼちは、ぐわっとおそいかかってきました。

わたしをつかまえ、のみこもうとします。

必死で柱につかまりましたが、ぐいと引っぱられて、はずされてしまいます。

それでも、あきらめずに入口の柱にまたしがみつくと、

やせつぼちに、どうつと引っぱられ、

柱は折れてくだけ、入口の屋根が、どつとくずれおちました。

わたしはやせつぼちにとらえられ、浜まで連れていかれてしまいました。



夜も昼も、海をいき、
どこをめざすのかも、わかりません。
あるところには、
羽毛の海があり、
またあるところには、
竹の生えた荒れた海がありました。
しなった竹が、ピンと跳ねあがれば、
すさまじい水しぶきがあがり、
そのしぶきが、ザザザと天から降りそそいで、
まるで嵐の日の雨のようです。
その竹が、すつと海の底に沈んだすきに、
すばやく竹の生えた海をぬけました。

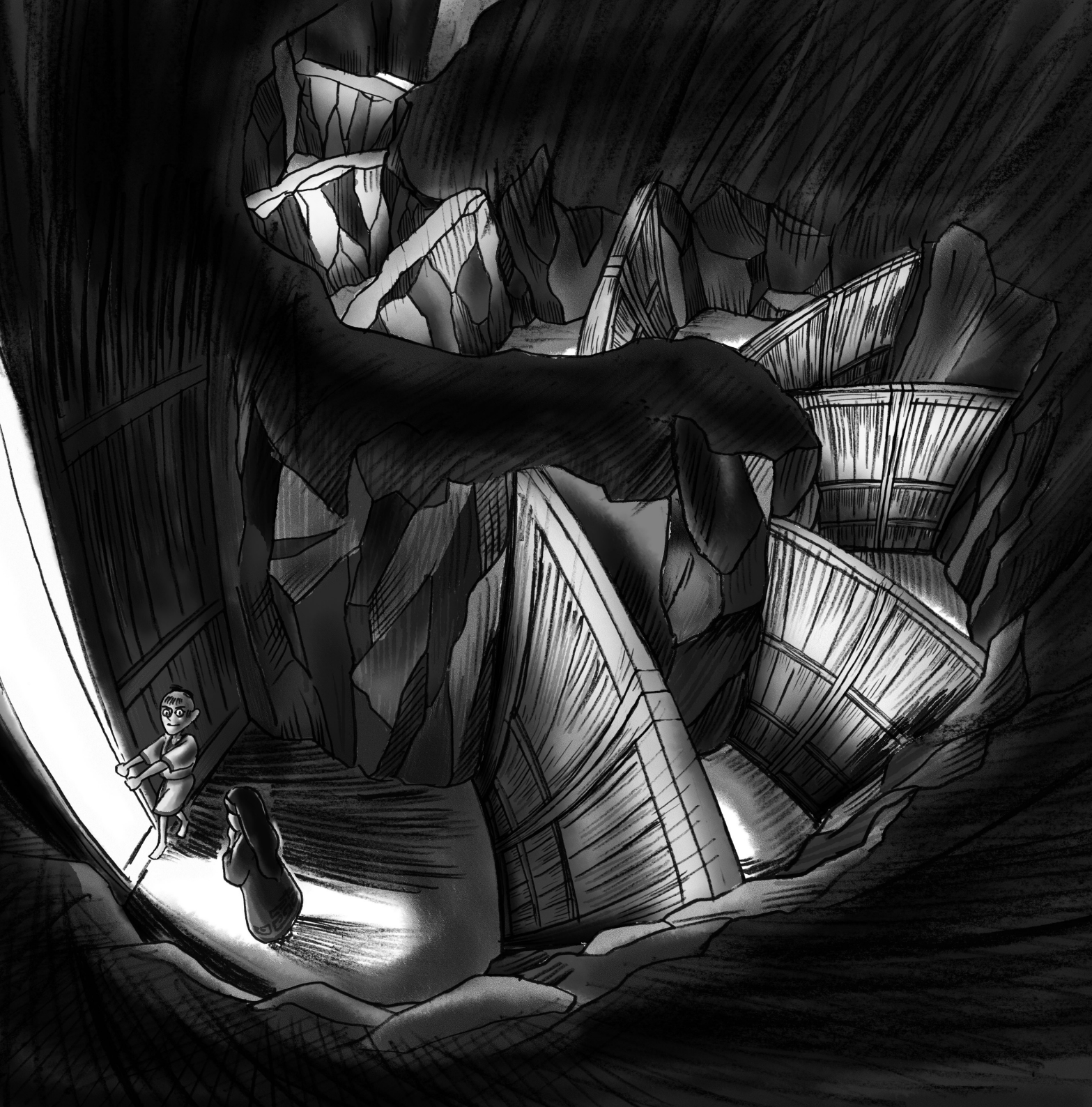
さらに進んでいくと、やがて、
雲がわきあがり、雲が吸いこまれていく、
世界の果てに、いきあたりりました。



わきたつ雲のなかをつきぬけると、
いきなり、わっと、光があふれました。



目の前には、美しい大地が、はるばると広がっていました。
大地をつらぬいて、一本の川がきらきらと光りながら流れています。
川は、地平線のかなたの青くかすむ山々へと、つづいていました。
やせつぼちは、川にそって進んでいきます。
山々は、みるみる近づいて、
やがて、天に、そびえたつほどになりました。



さらに進むと、山のなかほどに、洞窟がありました。
その入口は、岩の戸でかたく閉ざされています。
やせつぼちがその戸を開けました。
そのなかには、また岩の戸が、そのなかにも、また岩の戸が……
と六重の岩の戸をくぐると、こんどは、がっしりした木の戸がありました。
やせつぼちが、その戸を開けました。
すると、そのなかには、また木の戸が、そのなかにも、また木の戸が……
と六重の木の戸をくぐると、また戸があり、
その向こうから、うっすらと、灯りがもれていました。
その戸を開けると、なんとということでしょう……



そこには、おどろくほど大きな広間があつたのです。
まんなかの囲炉裏で、火が赤々と燃えています。
炉端には、小山に手足をつけたような、巨大な魔物がいました。
あぐらをかいた一方の足は、戸口にまで届き、
反対の足は、奥の窓にまで届いています。
やせつぼちは、わたしを魔物の向かいに座らせると、
こういいました。

「ご主人さまの、お言いつけどおりに、
コタンコロカムイの妹を、さらってまいりました」
魔物は、まんぞくそうに、うなずきました。

わたしは、その日から、魔物の洞窟で暮らしはじめました。
いつも、やせつぼちに見張られ、にげようにも、にげられません。

自分の身の上、かなしくてならないのですが、
兄のことを思うと、さらに胸がはりさけそうでした。
たった一人の妹であるわたしが、いきなり消えて、
兄は、どんなに心配していることでしょう。



毎日がつらく、さみしくて、ただただ泣きながら暮らしていると、ある日、遠くから、カムイが竹の生えた海をわたってくる音が、ひびいてきました。ああ、とうとう助けがやってきてくれた、とほつとしましたが、そのすぐあとに、カムイが死んで、とおくへ去っていく音が聞こえてきたのです。魔物は、ふてぶてしく、わらいました。

「どんなカムイであろうとも、ここには近づけまい」
わたしは、前にもまして、つらい気持ちになりました。

ところが、しばらくすると、こんどは、
えらいカムイが、海をわたってくる音が、ひびいてきました。

こんどこそ！ と思いましたが、
その音は、竹の生えた海につくつかつかないかで、ふつと消えてしまいました。
しーんと、物音一つしないなか、

ああ、やっぱりだめだったのか、とがっかりしていると、いきなり、岩の戸を踏みやぶる音が、鳴りひびきました。
一つ、また一つと、戸をやぶる音が近づいてきます。

助けが、やってきたのです！
とうとう、最後の戸がやぶられました。



やぶられた戸の向こうには、靄のかたまりが、ふわりと浮かんでいました。靄のなかから、カムイの声がひびきました。

「魔物よ、よく聞け。」

魔物は、魔物と結ばれるべきもの。

コタンコロカムイの妹をほしがるのは、身のほど知らずめ！

しかも、むりにさらっていくとは、許しがたい。

コタンコロカムイにかわって、

わたしが、おまえをこらしめにきた」

カムイは、いきなりわたしをだきかかえると、

洞窟の外へと走り出ました。

ひらりと雲にとびのつたとたん、

すぐ後ろで、おそろしい音がひびきました。

ふり返ると、踏みくずされた山が、ガラガラと音を立てて、

六重の地獄の底へと、転げおちていくところでした。

これでは、洞窟のなかにいた魔物も、

とても助かるわけがありません。

わたしはようやくやく、あの魔物から、のがれたのです。



雲は、ものすごい速さで空をかけていきました。
耳もとを、風がビュウビュウと吹きすぎていきます。
のぼりにのぼったところで、
わたしは、砂浜に投げだされました。

靄のなかから、大きな声がひびきました。

「いいか、わたしのいうことをよくきくんた。

おまえが、さらわれてからというもの、

おまえの兄の、コタンコロカムイの悲しみは、

たいへんなものだった。

あまりにもかわいそうなので、

わたしは、おまえを取り返してやることにした。

おまえも知つてのとおり、わたしはあの魔物を、

魔物のすむ山もろとも、六重の地獄へと踏みおとした。

さあ、家にもどつて、おまえの兄に、このことを知らせてやるがいい」

そう言いおわると、靄は、天へ天へと、高くのぼっていきました。

靄のすきまから、アットウシの着物のすそに燃えたつ炎と、

こげた刀の鞘が、見えたのです。

砂浜には、わたしの家へと通じる道がありました。
わたしは、兄の待つ家へと、まっしぐらに走っていききました。
兄は家のなかで、起きあがる力もなく、ぐったりと横たわっていました。
わたしは兄にかけより、すべてをくわしく話しました。
すると兄は「ああ、妹よ！」と声をあげ、床から起きあがったのです！
「そうだったのか。それは、こわい思いをしただろう。
あの日、山から帰ってみたら、おまえが消えていた。
行方知れずになったおまえを返してほしいと、
わたしは、イナウを作り、
毎日毎日、カムイに祈っていた。
カムイは、わたしの願いを聞いてくれ、
おまえを取り返しにいつてくれたのだが、
はたせずに死んでもどつてきた。
カムイさえ、おまえを救い出すことができなかつたと知って、
わたしは、すっかり気を落として、床にふせってしまったのだ。
ところが、ある日、アイヌラックル*が、
おまえを助けにいくと、いつてくれたのだ。
さあ、こうしてはられない。お礼の宴を開かなくては」





兄は、さつそく、お酒を作りはじめました。
数日すると、お酒のいい香りが、家のなかをいつぱいに満たしました。
女たちは料理を用意し、男たちは木をけずって美しいイナウを作りました。

「さあ、仕度は、ととのつた。」

カムイたちとアイヌラックルをお招きして、お礼の宴を開こう」

兄は、そういつて、あちこちに招待の使いを出しました。

まず、やってきたのは、あのアイヌラックルさまです。

兄は、その手を取って家の奥へとみちびぎました。

アイヌラックルさまが座ると、兄は、その向かいの席に座りました。

それから、次から次にカムイが訪れ、家のなかは、もうカムイたちでぎっしりです。

すべてのカムイの盃にお酒がふるまわれて、宴はたいへん盛りあがりました。



やがて、カムイたちは、すっかり満足して帰っていきました。
最後に一人残ったアイヌラックルさまに、兄は、かしこまって、こう切りだしたのです。
「さて、カムイなるアイヌラックルよ。

どうか、わたしの言葉をよく聞いてほしいのだ。

このたびは、よくぞわが妹を、魔物の手から救いだしてくれた。
心の底から、ありがたく思っている。

こんな妹だが、いままで大事に育ててきた。

どうか、わが妹を、嫁にもらってはくれないか」

「よろこんで」

アイヌラックルさまは、すぐにそうお答えくださったのです。

その時の、兄のよろこびようといったらありません。

そんなわけで、わたしは、
この山の城に嫁いできたのです。
毎日、好きな刺繍をしたり、料理をしたり、
とても楽しく暮らしています。

アイヌラツクルさまは、ほんとうにすばらしい方で、
わたしは、一日一日、深く満ち足り、
これといってほしいものもなく、
食べたいものもなく、
しあわせに暮らしているのです。

と、コタンコロカムイの妹が、語りました。

